明日への道標

金銭の奴隷になるな
―石油王 ロックフェラーの葛藤―

㈱日本設備工業新聞社
代表取締役社長　高倉克也

信仰を日々の糧にしていた母は商才のある息子に質素・倹約・勤勉の美徳を説きつづけた。母の教えに導かれてジョン・ロックフェラー（1839－1937）は石油事業で成功し、稀代の石油王として名声を轟かす。

とはいえ一代で世界的な石油帝国を築き上げるのは並大抵のことではない。同業他社を容赦なく駆逐し、淘汰し、市場を独占する強引な手法が批判の嵐を巻き起こした。

第一線から退くと一転して慈善活動に情熱を注いだ。莫大な基金で財団を設立し、医療、福祉、教育などさまざまな分野で公益事業を助成する。

あるノンフィクション作家はロックフェラーの生涯を俯瞰して「彼の良い面はとことん良く、悪い面はそれと同じくらい悪かった」「これほど矛盾した人物はほかにいない」と論評した。彼は天使だったのか、それとも悪魔だったのか。

スタンダード・オイル

ロックフェラーはアメリカ・ニューヨーク州のリッチフォードで６人兄弟姉妹の２番目に生まれた。薬の行商人である父ウィリアムはめったに家に帰らず地道に働こうとしなかった。キリスト教プロテスタントの教派バプテストの熱心な信者である母イライザは子供たちを連れて教会に通い、聖書を学ばせた。母を敬愛するロックフェラーは家計を支えるために幼い頃から農作業を手伝い、七面鳥を育てて売り捌いた利益を利子つきで近隣の住民に貸しつけるなど利発な子供だった。

ジョン・ロックフェラー

14歳のとき一家はオハイオ州クリーブランドに移り住む。地元の高校に入ったものの、できるだけ早く社会に出ようと商業学校の短期コースで簿記を習得した。まもなく農作物の配送会社で雑用係り兼簿記見習いの仕事を見つけて就職する。当初は無給、３カ月後に月給25ドルで本採用された。母の教えを守って給料の約１割を教会に寄付した。日曜日は教会へ行き、一番前の席に座って礼拝を捧げ、清掃などの奉仕活動に精を出す。

３年間勤務して独立を決意し、農作物の配送で資金を蓄えた。石油ビジネスの将来性を察知し、1862年に原油の品質を高めて灯油に変える石油精製会社をパートナーと共に設立。2年後に教師のローラと結婚し、一男四女を授かった。

同社を出発点に小規模の同業者を次々と買収して急成長し、1870年にスタンダード・オイル・オブ・オハイオを立ち上げる。資本金は100万ドルでロックフェラーが社長に就任した。石油精製業にとどまらずパイプラインの建設、林業、鉱山、鉄道、トラック、原油樽の製造などの関連事業にも手を広げ、ペンキ、タール、接着剤などの石油製品を製造・販売してさらに実績を伸ばした。

トラストによる独占

スタンダード・オイルの経営手法は常に悪評がつきまとっていた。原価割れの低価格で石油を販売し、同業他社が廃業に追い込まれるのを見届けてから売値を吊り上げて損失を取り戻していた。

1882年、ロックフェラーは競合企業を糾合して新たにスタンダード・オイル・トラストを結成する。トラストは独占的な企業合同で事実上の吸収合併を意味していた。全米初のトラストは10年足らずで石油精製業の90％を支配する。同業他社はクリーブランドの虐殺と非難し、ニューヨークの大手メディアは「もっとも残酷で、厚かましく、無慈悲な独占」と痛烈に罵倒した。

これをきっかけに不当廉売の禁止などを明文化した独占禁止法（シャーマン法）が1890年に成立する。オハイオ州はトラストの解散を求めて訴訟を起こし、1892年に勝訴した。しかし同年、ロックフェラーはニュージャージー州でふたたびトラストを結成する。

公判中にロックフェラーのストレスは極限に達した。神経衰弱、気管支炎、不眠症などを患い、髪がすっかり抜け落ちた。

1902年から社会派の総合誌で「スタンダード・オイルの歴史」と題した連載が開始された。筆者の女性ジャーナリストのアイダ・ターベルは違法性の強い企業経営の内幕を赤裸々に暴露し、社会的な反響を呼ぶ。彼女の父親も倒産に追い込まれた犠牲者のひとりだった。スタンダード・オイルに対して彼女は「公正な勝負を行わず、みずからの巨大さで破滅した」と糾弾した。

アメリカのGDP（国内総生産）が約240億ドルだった当時、ロックフェラーの資産は約２億ドルに達していた。1911年、最高裁は最終的にスタンダード・オイルがシャーマン法に違反していると判決し、トラストの即時解散を命じた、トラストを構成していた40社近くの企業はそれぞれ個別の企業に切り離された。同年、ロックフェラーは社長を辞任する。そして「金銭の奴隷になるのはもうやめた。金銭を奴隷に使ってやろう」と慈善事業家へ転身していく。

さらば、天国で会おう

引退後の1913年、約１億8000万ドルの基金でロックフェラー財団を設立し、人類の福祉増進を目的にアフリカにおける黄熱病の根絶などに尽力した。研究スタッフには日本から渡米した医師の野口英世も含まれていた。

しかしその一方で史上最悪の労働争議が発生し、歴史に汚点を残す。1914年、コロラド州ラドローで炭鉱労働者が処遇の改善を求めてストライキに突入した。交渉は決裂し、銃で武装した警備員が鉱夫やテントに住む家族を襲撃して30人以上が死傷する。鉱山会社のオーナーはロックフェラー家で一人息子のジョン・ロックフェラー・ジュニアが取締役を務めていた。全米の労働組合などがロックフェラー家の拠点であるニューヨークで抗議デモを行い、警官隊と衝突して多数の逮捕者を出した。異常な事態に社会事業家のヘレン・ケラーらがロックフェラー家に抗議する。

第１次世界大戦が勃発すると飛行機や戦車など近代的軍事兵器の燃料として石油の需要が激増し、ロックフェラー家はヨーロッパ市場も席巻する。1924年の長者番付でロックフェラーは自動車王のヘンリー・フォードや金融王のJ・P・モルガンを抑えてトップに君臨した。慈善事業ではシカゴ大学の創立、ロックフェラー・センターの建設、ニューヨーク近代美術館の開設、教会への寄付、国連や国立公園への無償の土地提供などを行って話題になる。

率先してイメージチェンジを図ろうとロックフェラーは広報（PR）の父と呼ばれたアイビー・リーを起用した。大恐慌の際、リーのアドバイスで街を歩いては人々に真新しい銀貨を分け与え、幸運のシンボルとして歓迎された。

生活は簡素で酒もタバコもたしなまなかった。97歳の長寿で他界するまで「神が私に金を与えた」と信仰を成功の要因と信じていた。

いよいよ臨終のときを迎えてフォードが見舞いに訪れた。万感の思いを込めてロックフェラーは「さらば、天国で会おう」と別れを告げた。だがフォードの返事は期待に反したものだった。彼は素っ気なく言った。「あなたが天国に行けたらね」。